留学生論文コンクール 2025 に関する所感

岡部　豊

「留学生論文コンクール 2025」には、昨年より多く 54 件の応募論文がありました。応募者の皆さん、関係者の皆さんに感謝します。「留学体験を通して発見した新たな目標」という論文テーマですが、応募者の状況に応じて、身近な問題を取り上げたものから、研究論文的な考察をしたものまで、幅広い応募論文がありました。論文構成もしっかりした論文が多く、昨年よりレベルが高いという印象を持ちました。

今回の論文で注目したのは、見過ごしがちな小さなことから留学生としての社会との関わりを通して新たな目標を見出したという論文です。献血という個人のボランティア的な活動から社会的な連帯に結び付けるという経験や、お辞儀の習慣から宗教、文化の「意識的な適応」を考えていくという提言は、留学生でなければできない観点であると思います。また、視覚障害者の移動を支える都市環境の考察、留学生の医療アクセス、メンタルヘルスの課題を多文化共生と絡めて論じる論文など、テーマとして興味深く読ませていただきました。オーバーツーリズムにおけるマナー違反の問題など、旅行者を含む外国人への対応については皆さん関心を持たれると思いますが、留学生の視点から解決策を提案することは意味があることと思います。

一方、大学院生では、高度な研究に基づいた論文も見受けられました。社会的な関わりも深い研究テーマである場合、論文として完成されたものになっています。また、すでに実社会で国際交流に関わる仕事の実績を持ちながら、大学院へ進学して、新たに「対話」の可能性を見つけたという論文もありました。この論文コンクールは、単なる研究論文を評価するものではないので、研究の内容を超えて、新たな社会的な目標を見出した論文に高評価を与えました。

論文の評価においては、論旨が一貫していること、構成がしっかりしていることが求められます。総じて、日本語に問題がある論文はあまりありませんでした。AI 利用の支援ツールなどを利用している場合もあると思います。AI 利用についてはいろいろな議論があり、執筆要項でも生成系 AI の出力結果の使用についてガイドラインを定めています。新しいツールは、的確に利用していくことが必要です。

金賞を受賞された薛雪さんの論文「日中の文化的市場共創を支える媒介者を目指して」について一言述べます。以前に日本に留学して祖国に帰って実務経験を経て、再び来日して日本酒学を大学院で学ばれるという経緯は大変興味深く、最後に新たに見出した目標をまとめられる論文構成もしっかりしていて、まさに金賞にふさわしい論文です。留学経験の短い学部学生から見ると圧倒されてしまうような出来の論文ですが、それぞれの状況に応じて論文を評価するので、若い留学生も積極的に応募していただきたいと思います。

薛雪さんのお話を聞いて、留学生を連れておく多摩地域に連れていく企画をお手伝いしていたことを思い出しました。その時には、東京都で一番大きい酒蔵で「澤乃井」という銘柄の日本酒を作っている小澤酒造に毎年留学生を連れていき、社長さんから作る工程から何からお話を伺い、

留学生は大変興味を持っておりました。社長さんは非常に文化的な素養のある方ですので、何かありましたら、ぜひ東京の小澤酒造さんの方にも足を運んでいただければ良いんじゃないかと思いました。

このような企画で留学生新聞さんに受賞論文を順番に掲載していただけるということで協力していただいているのですが、もう少し広くこの論文、あるいはこの座談会の様子を広く共有できればいいと思います。と申しますのは、いろいろな最近の国際情勢を考えて、外国人の生活、あるいは特に留学生の考えというようなことを世の中一般ではあまり知られてないのではないかと思います。

外国人に厳しいような論調も若干ありますけれども、それはやはり経験に乏しい人たちが言ってるのではないかと思います。研究の場では国際的な交流というのが非常に盛んですし、去年も一昨年もイランからドクターコースの希望、ポストドクターの希望という連絡を受けました。その先生の研究内容を見ると大変優れた研究をされていました。国際的に価値のある論文の数の国際ランキングがありますが、日本は毎年どんどん順位が下がって今 13 位、イランは 12 位です。イランという国がどれだけ国力があり、基礎科学に対しても力を持っており、実は日本よりも上になっているということを全然皆さん知らないのではないかと思っています。留学生を通して、あるいはその研究を通して、こういう留学生を通した活動がもう少し世の中全体に共有できればいいのではないかというふうに多少思っております。

留学生は、日本に滞在する外国人でありますが、学問を学ぶことを通じて、日本人学生、教員と接触し、また他の国の留学生と交流を持ちます。地域との関係についても留学生の特性を生かした関わり方ができると思います。次年度以降も「留学生論文コンクール」を通じて、国際相互理解がさらに進むことを期待します。